

井上靖『四角な船』考

— その選ばれた者たちをめぐって —

工藤 茂

「四角な船」というのは、作者もその「自作解題」に「旧約聖書の創世記に出てくるノアの方舟を象徴したものであります」と述べているように、方舟のことである。旧約聖書創世記第六章を開くと、そこには、

即ち其方舟の長は三百キュビト其濶は五十キュビト其高は三十キュビト、又方舟に導光隔を作り上一キュビトに之を作り終べし又方舟の戸は其傍に設くべし下牀と二階と三階とに之を作るべし

と書かれている。ここに頻出するキュビトとは、長さの単位でひじから中指までの長さだと、あらかじめ・そうべえ『外來語辞典』(角川書店)にある。わが国の尋に似た単位だ。

ところで、この方舟を作ったのが、ノアであったことは周知の通りである。ノアは『義人にして其世の完全き者』であり、『神と偕に歩』み『エホバの目のまへに恩を得』た。神は世の乱れを嘆き、世を乱した人々を世とともに滅ぼすために大洪水を起すことにした。そして、そのことをノアに告げる

と同時に、『汝松木をもて汝のために方舟を造り方舟の中に戻を作り瀝青をもて其内外を塗るべし』と命じた。

創世記第七章はその方舟に載せるものについて、以下のよう

に述べている。
エホバ、ノアに言たまひけるは汝と汝の家皆方舟に入るべし我汝がこの世の人の中にてわが前に義を視たればなり 諸の潔き獸を牝牡七宛汝の許に取り潔らぬ獸を牝牡二 亦天空の鳥を雌雄七宛取て種を全地の面に生のこらしむべし

このようにしてノアは人々の中から選ばれ妻、子等、子等の妻とともに方舟に乗ることになる。

さて、現代の「四角な船」に乗るものは、どのような「神」によって選ばれた、どのような者たちであろうか。それを井上靖の小説に探る前に、この小説の執筆中に生まれた詩「雨期」において、作者がどのような者たちを選んでいるのかをその詩に見て置きたい。「雨期」というのは次のような詩であ

深夜、依然として降り続けている烈しい雨の音／＼で眼覚めると、いつも私の寢室兼書齋の小さい／＼部屋は方舟ほうふねになつてゐる。松脂と瀝青で塗り固／＼めたあのノアの方舟ほうふねただ私の方舟はノアが神／＼の命によつて造つたあんな大きなものではない。私製の小さい奴だ。

私は己が方舟に収めるものを物色する作業にと／＼りかかると。——花という花が死に絶えた中でひ／＼とり神韻を帯びて、わが家の庭に咲き続けてい／＼るあじさい。長雨のために野性を取り戻し、何／＼ものをも信じない孤独な眼付きになつてゐる白／＼い紀州犬。同じように雨に叩かれて、廢園とし／＼ての不逞な相貌を帯びて来た浜木綿の花壇。そ／＼して創世紀の童女の面輪と純潔な魂を併せ持つ／＼ている五歳の孫娘。

未明、私はやがて来る愛する者たちとの別離の／＼悲しみで心を濡らす。私が己が方舟に乗り込む／＼資格を持つていないからだ。私は耳をすます。／＼何ものかが天地に充満し、移動してゐる。季節／＼の、と言うより、正しくは業わざのようなものエ／＼ネルギーが、その場所を変えようとしてゐるの／＼だ。美しいものだけを乗せた小さい方舟を、私／＼が両の手で晩闇の中に押し出す時は刻々迫りつ／＼つある。——こうした時なのである。私を別離の悲しみの中で眠らせるために、終夜烈しく降／＼り続いた雨が突然霧のようになつて静かなそれになる／＼のは。

右の詩では「私」が神とノアを兼ねる。にもかかわらず、「私」は《己が方舟に乗りこむ資格を持つていない》と、厳しく自己を裁く。その上で、あじさい、紀州犬、浜木綿の花壇、そして五歳の孫娘に、方舟に乗りこむ資格を与える。それらは、ただ単なるあじさいの花でもなければ、紀州犬でもない。《ひとり神韻を帯びて、わが家の庭に咲き続けているあじさい》であり、《長雨のために野性を取り戻し、何ものをも信じない孤独な眼付きになつてゐる白い紀州犬》でなければならぬ。浜木綿の花壇は《廢園としての不逞の相貌を帯びて来》なければならぬし、五歳の孫娘は《創世紀の童女の面輪と純潔な魂を併せ持つてい》なければならぬ。いずれもその美しさ故に「私」の愛する者たちである。

詩の中に登場する「私」は、作者井上靖と考えてほぼ誤りはなからう。従つて右の者たちは作者によつて選ばれた者たちであつた。その資格は《美しいもの》である。《美しいもの》だけが現代の方舟に乗ることができるのであつた。そして、神とノアを演じる作者は、自ら乗船を拒否し、愛別離苦の悲しみに甘んじていなければならなかつたのである。

2

小説『四角な船』で神とノアの役割を演じるのは、薨である。現代の社会で大洪水を予言し、方舟を作らせると言へば誰でもそれを狂人とするであろう。従つて作者は薨を狂人として設定した。そして、その狂人を追う人間として新聞記者

丸子東平を置いたのである。この人物設定によって小説『四角な船』はリアリティを獲得したのであった。ただ、薨の後には作者井上靖がおり、薨の選ぶ人間たちは全て井上によって造形されていく。それゆえ、詩「雨期」の場合と同じように、それらの人々はまた、井上によって選ばれた者たちだと言っているであろう。つまり、この小説には井上靖の人間観が色濃く流れているのである。

さて、薨が最初に四角な船に載せようとしたのは、牛と鶏であった。丸子東平がやつのことで薨に会った日、薨は牛と鶏を薨家の内部に残したまま、四角な船に乗せる人を求めて家を出ていってしまう。そのために薨家は大騒動となる。

「若の部屋に牛がはいっています」

おたきさんは言った。

「どうして、牛がはいったんや」

「若が入れたんですやろが。――手紙に書いてありました。その手紙、あとで読んで下され。どこぞに置いてある。電燈が点かんことには判らしまへんが。――牛と鶏を大切にして預っておくようにと書いてありました。預るも、預らんもあらへん。ちゃんと、若の部屋にはいますが。まずあれから始末してくれはりませんか。えらいこっちゃ」

おたきさんは言つて、両手で顛顛を押えた。

勘左、耳無、丸子が入つていくと、

部屋の中はたいへんなことになっていた。机の上に一

羽、床に三羽、ソファの上に一羽、――部屋は五羽の鶏に占領されている。床の絨毯は牛の泥脚で踏みじられ、方々に牛の排出物が散らばっている。

といった状態になっていた。

後に薨は多数の小鳥たちを四角な船に載せようとする。この小鳥たち同様、何故彼が牛や鶏を船に載せようとしたのか、その理由は定かではない。おそらくそれは旧約聖書にならったものと思われる。従つてこれらの動物の乗船資格を、ここであれこれ詮索するのは止めておこう。

次に薨が、古代アツカド文字で《――汝、船に乗れ》と書いた紙片を入れたカメオを渡したのは、佐渡の老婆であった。薨の後を追つて佐渡に渡つた丸子は、案内された浜辺にその老婆を見た。それはまるで置きもののようであった。《なんとい置きものであろうかと、丸子は思った。一步一步近づいて行けば行くほど、その置きものは素晴らしく見えた。皺だらけのくしゃくしゃな顔をしている。潮風にやけた黒い顔である。その顔を俯向けて、一心に網をつくろつている。ひと握りにできそうな小さい体を、漁師の着そうな仕事着で包んでいる。》

その老婆は目が見えなかった。それなのに老婆にはいろいろなものが見えていた。

「今日は特に海がきれいです」

「きれいですか」

（丸子が）思わず質問の口調になると、

「きれいです」

そう言うてから、ふいに笑顔になつて、

「見えないのに、どうしてきれいななど言うかとお考え
でしょう。——でも、見えるんですよ、青い海が。小さ
い時から海の傍で暮し、毎日波の音を聞き、暖い日はこ
うして浜に出ているんですから、海は見えます。眼はな
くても、ちゃあんと海は見えます」

「ほう」

すると、老婆は何とも言えず邪気のない顔を少し
仰向けて、

「海も見えます。魚も見えます。メバルはこんな魚で、
カレイはこんな魚と、ちゃんと区別して見えます。浜も
見えます。岩も見えます。村の人の一人一人の顔も見え
ます」

と言つた。

このような老婆だから、薨のよさも見える。彼女は丸子に
「いいお方ですものな。あんないいお方はない」と、薨のこ
とを言うのである。丸子はその老婆の顔を《生れつきの盲人
の顔は暗いものであるが、いささかの暗さもなく、幼児の顔
の持つあどけなさがあつた》と見、その笑顔を《きれいだつ
た。一瞬花でも開くような、そんな笑い方だつた》と思うの
である。この老婆の美しさを、作者は丸子の感動を通して、
次のように描いてみせる。

丸子は己が心に立ちこめてゐる感動に身を任せていた。

いいな、と思う。これほど、いいなと思うことは、一生
の間にそう度々は経験できないに違いない。狂人は老婆
のために、針に糸をさしてやり、そして、時折、口にする
言葉と言へば、老婆をほめる言葉ばかりである。實際
にまた、老婆はほめられて然るべきである。生れつきの
盲目であるにも拘らず、何と美しく生きてきたことか。
誰を恨むでもなく、誰を羨むでもなく、己が運命を素直
に受けとつて、長い人生を生きてきたのである。もしそ
うでなかつたら、こんな美しい顔はできあがらなかつた
に違いない。こんな美しい笑いを笑うことはできなかつ
た筈だ。えらいものである。薨でなくても、えらいと言
う以外仕方がないだろう。

老婆の美しさは、『傍観者』の詩人井上靖のことは借りる
ならば《天命》に従順に生きてきた人間の美しさであつた。
そしてそれは、現代の人間から失われようとしている美しさ
でもあつた。この美しさゆえに、彼女は現代の方舟に乗る資
格を与えられたのである。

3

薨の姿を求めて、中野の風ヶ丘アパートを訪ねた丸子の前
に姿を現したのは、薨ではなく七条みやこ・みどりという奇
妙な母子であつた。薨は既に、例の乗船証を一つこの母子に
渡したうえで、姿を消していた。

七条みやこはクラブ・エベレストに勤めていて、その名刺

を丸子に示す。丸子が「シチジョウですか、ナナジョウですか」と訊くと、「どっちでもいいんです。いい加減につけた名前ですから」と答える。従つて、彼女の本名は不明のままである。

彼女は「でも、わたしたち、生き身でしょう、お互いに。

たまに遊びたくなくてもふしぎないじゃありませんか」とかあるいは、みどりのためなら部屋代や権利金が少々高くても大丈夫、「いやな人でも我慢して、一、二晩つき合う気になれば、権利金ぐらいへっちゃらよ。あとで体に石鹼つけてごしごし洗つてしまえば、たいしたことないわ」などと危険なことを言う。その一方ではまた、「大洪水が来たらさっぱりすると思うわ。種痘がいいの、悪いの。粉ミルクがどうの、こうの。それどころか母乳まで変になつてきたというじゃありませんか。子供ぐらい、心配しないで、育てて行ける世の中ではないといけないと思います。大人なんて、少しぐらいどうなつてもいいけど、子供だけはね。——みどりちゃんに少しでも変なことがあつたら、わたし、承知しませんわ。だんだん変な世の中になつてくるから、洪水もいいと思うの」と、母親としてのまっとうな感想も述べる。ところが後に触れるように、実はみどりはみやこの本当の子供ではなかつたのである。

さて、作者はみやこを丸子の眼を通して、以下のように描いてみせる。

《七条みやこの瘦せぎすの小柄の体軀は、少し離れたところ

ろから見ていると少女である。《十八・九ぐらいにしか見えな
い。略》茶色がかつた頭髪を大きく波打たせている。《眼を
見張ると、なかなかいい眼をしている。《眼がきらきらして、
いやに魅力的である。》

《丸子は訪問を受ける度に、七条みやこの顔を仔細に検討
した。口からは容易ならぬ言葉を発射していたが、二つの眼
はそれと無関係に澄んでおり、時折、その横顔はベラスケス
描くスペイン貴族のお姫さまみたいに見えたりした。奇妙な
ことであつた。》

丸子はこのみやこの言動に接し《言うことはすさまじいこ
ともあり、上品なこともあつた。が、さしてアンバランスな
感じはなかつた。どこかで相反する雑多なものが統一されて
いた。》という感想を持つのであつた。

みやこの子みどりは、みやこによつて次のように紹介され
ていく。

「この子のお父さんもお母さんもよくは判りません。拾つ
たんですもの、わたし」

「いまは、わたしの子供よ。でも、わたしが生んだのでは
ありません。が、そんなことどっちでもいいでしょう。生も
うと、生むまいと、同じようなものよ。(略)」

「みどりちゃんは本当は吉村みどりつて言うの。本籍は
九州の田舎ですけど、アパートの御主人が役場に照会して
も、引きとり手が現れないし、お父さんとお母さんはみど
りちゃんが生れた時は別れていたらしいんです。それに大体

二人ともどこへ行ったのか判らないの。——それで、わたし、貰っちゃった」

つまりみどりは、みやこにとっては赤の他人である。その点で、後に紹介する大城寺之進と虎の關係に似ている。ところがみやこは、実の子以上にみどりを大切に育てようとしている。

「この子、将来は大音楽家になると、ラカちゃん（薨のこと）に太鼓ばんをおして貰いました。どこかの国の土の中から出て来た大昔の石の彫刻に、この子と同じ顔をしたのがあるんだそうです。それが音楽の女の神さまなので、みどりちゃんもそうなると言うんです。（略）」

みやこは薨のことは信じて、みどりを音楽家に育てようと思命である。そこには功利も打算もない。自分の身を挺して、みどりに尽そうとしている。丸子はそのことを同僚の瀬宮に「（略）薨大人が、みどりちゃんに音楽の天分があるという託宣をくだして、どこかへ行ってしまったばかりに、七条女史はいま苦労している。いま苦労しているばかりでなく、みどりちゃんを大音楽家にするために、この若いママさんは一生を犠牲にしようとしている（略）」と言う。

七条みやこ・みどり母子のこの図式は、この小説で次に薨から乗船証を貰う、大城寺之進と虎のそれと殆んど同じである。と同時に、私には作者の遠い過去、おかの婆さんと幼少時の靖の構図が浮かび上がって見えてくる。もっとも井上はこの時の愛の体験をもとにして、後年愛に取引きのにおいを

嗅ぐのだけれども。それが『四角な船』の七条みやこ・みどりの愛にはそのにおいが無い。むしろ、献身の美しさがそこから放射してくる。これは井上靖の孫体験によって新しくもたらされた愛の形ではなかるうか、と私は推測している。あの「雨期」という詩に登場する五歳の孫娘への。

七条みやこ・みどりのどちらが乗船者として選ばれたのか、作者はそれを明らかにしない。しかし丸子東平は、二人一組として考えている。そして、みどりの附添人として乗ればいいと言っている。しかしみやこは「心のきれいな人だけがそのお船に乗れる」と薨が言っていたといひ、「わたし、自信ないわ。ずいぶん悪いことをしているんですもの」と言う。しかしみやこは、自分を犠牲にしてもみどりを立派に育てたいという、きれいな心を持っている。十分にその資格を持った女性であった。

4

薨に「七人目だ」と言つてカメオ（乗船証）を渡されたのは、動物園で虎の飼育係をしている大城寺之進という男であった。《七条みやこ・寺さん、佐渡の老婆》の三人は小説に登場する。しかし他の四人は出て来ない。出てこなくても、《心のきれいな》人々であることは間違いない。つまり、現代社会からはむしろ疎外されて生きている人々である。登場する三人もそうなのだから。

さて、大城はどのように表現されているのだろうか。本文

からその箇所を拾ってみよう。

「一見すると、おっさんといった感じであるが、よく見ると、案外まだ若い。中年には違いないが、せいぜい三十七、八歳というところであろうか。それなのに、おっさんという感じがするのは、その身辺に漂っている鬱悶気のためであろう。粗末な作業衣に身を包み、虎の子の歩く方にいっしょに歩いてやっているところは、どう見ても浮世離れしたものである。顔がまたいい。何とも言えずおだやかで、温かくて、素朴である。」

これは丸子の眼を通した表現であるが、後半の部分は佐渡の老婆をふと思わせるように描かれている。彼は今、難産でひよわかった幼い虎を飼育している。その虎の母親は四十三頭の子供を生み、その度に彼が面倒を見てきた。

「私はよく（藪に）言ったんです。私は自分の家内のお産の方は人に任せて、虎の方につき添ってやった、そのくらいでないとはだめだと。——人間の方は病院に入れれば、ちゃんと世話をしてくれますからね。虎の方はそうはいかない。私でないとはだめです」と彼は丸子に言う。そう言うだけあつて、虎は、子供の虎は勿論のこと、母親の虎も父親の虎も、彼とは気心が通じ合っていて、彼の姿を見ると甘えて、大きい猫になってしまう。

丸子は寺之進を呼びに来た他の飼育係に、寺之進が去ったあとで次のように質問する。

「寺さんのような人は何人か居ますか」

すると彼は、

「居ないでしょうな。特別ですよ」

と答える。さらに

「どういうところが特別なんですか」

と丸子が質問すると、

「判りませんな。どこかが違うんだ。まあ、ひと口に言えば、虎の気持がよく判るんでしょな。それにまた虎の方も寺さんの気持がよく判る。そういうところが特別なんでしょな」

と答える。

鉤括弧の会話の部分が引用部分である。それによると大城寺之進は虎に愛情を持ち、虎と交感できる特別な男として描かれている。彼は虎について、以下のような認識を持っている人間でもある。

「一般に虎はライオンより気難しいと言われています。そのくらいだから、嘘は言わないし、素直だし、思慮はあるし、判断も正確です。相手の立場に立って物を考えるし、遠慮深いところもあり、謙遜でもある。竹を割ったようすつきりした性格で、義侠心もある。恩義のためには、いつでも生命を投げ出すでしょう」

大城の話聞いて丸子は《なるほど》と思い、七条みやこは「まるでみどりちゃんみたいね」と言う。この話によると虎は現代人が失った美質をみんな備えていることになる。そして、みどりも。この美質によってみどりと虎は「四角な船」

への乗船証を得たことになる。しかしこの一人と一匹は、一人あるいは一匹で乗船してはそれからが困るであらう。そこに付添者としての七条みやこ並びに大城寺之進の必要性が生れてくる。しかもこの二人は、みどり、あるいは虎に献身的な愛情を持っている《心のきれいな人々である。それ故薨は、これらの奇妙なカップルを乗船者として選んだのであらう。

小説『四角な船』の批評性は、これまで検討を加えてきたように、現代の社会では失われようとしている人間の美質を持った人々を、現代の方舟の乗船資格者として描いてみせるところにあつた。そうすることによって、逆にその美しさを失つて利のためにあくせくしている現代人とその文明を、笑つて見せた小説であつた。『夜の声』も『樺の木』も、その点において同系列の小説と言ふことができる。そして『四角な船』は、その最後に位置する小説だったのである。

ところで、これまでに小説『四角な船』について論じたもの、あるいは何らかの形でそれに言及したものに、次のようなものがある。

(1) 高橋英夫「寓話となつていく現代——井上靖著『四角な船』書評」

(2) 高田欣一「正常人の怒り——井上靖著『四角な船』書評」

(3) 『井上靖小説全集30』(昭49・新潮社)「自作解題」

(4) 『井上靖小説全集31』(昭50・新潮社)「自作解題」

(5) 福田宏年「解説」(『井上靖小説全集31付録』一九七五・2・新潮社)

(6) 福田宏年「解説」(新潮文庫『四角な船』昭52・12)

(7) 村上嘉隆「四角な船」

右のうち福田の(6)の「解説」が、『四角な船』の作品の特質を的確に捉えているので、それを引用してみよう。

『四角な船』もまた、『夜の声』や『樺の木』と同じように現代のメルヘンという形を取っている。しかもこの場合は単にメルヘン風というだけではなく、神話的な趣も加わり、またアイロニカルでユーモラスな要素もひときわ強く感じられる。社会批判の鋭さと深刻さが増すにつれて、それと正比例してアイロニーとユーモアの度も増して行き、その対立とバランスがこの作品を越えた文学たらしめているということであらう。

さて、右の(1)から(7)までの間隔を縫うようにして、私も以下のエッセイや小論を書いてきた。

(8) 『四角な船』への航跡⁽⁶⁾

(9) 「挽歌の系譜——井上靖の文学世界」⁽⁷⁾

(10) 「薨の造形——小説『四角な船』の視点」⁽⁸⁾

(8)は日本近代文学における文明批評の系譜に、『四角な船』を位置づけようと、作者の批評性を追つてみた論考。(9)は井上靖の文学の一特性である挽歌の発想からなる小説の一つとして、『四角な船』を考えてみたエッセイ。そして(10)は、登場人物「薨」の造形を伝説のそれによつた作者の工夫について、

実証的に検討したものであった。この一連の論考は、一応本稿で終結する。本稿はこれまで見てきたように、『四角な船』の中に、作者の人間観を採ったものである。

〈注1〉

(1) 『井上靖小説全集31・四角な船』(昭50・新潮社)の「自作解題」。

(2) バビロニア北部に、メソポタミアにおける最初の統一国家アッカド王朝(前二三五〇ごろ—前二一五〇ごろ)が生まれた。サルゴン大王によって作られたセム族の王朝であった。アッカドの名は首都アガデに由来する。前三〇〇〇年紀にメソポタミア南部に住んでいた原セム族をアッカド人という。彼らはシュメール人から学んだ楔形文字をもとにアッカド語を作り、粘土書板に書き残した。アッカド語は、セム語のうち東方群に属する言語である。(以上『大日本百科事典』小学館・による)

(3) 雑誌『波』(一九七二年八月号・新潮社)

(4) 雑誌『海』(昭47・10月号・中央公論社)

(5) 村上嘉隆著『井上靖の存在空間』(一九八〇年・7・ユック舎)

(6) 『国学院雑誌』第75巻11号所収。後に、工藤茂著

『挽歌の系譜——井上靖の文学世界』(昭58・日駿)に収録。

(7) 『井上靖エッセイ全集月報7』(一九八三年・12・学習研究社)

(8) 『別府大学国語国文学』第三十号(昭63・12)